

日本口腔顔面痛学会 News Letter

【特集号】~The history of legends~③

(2022年1月7日発行)

日本口腔顔面痛学会 理事長 松香 芳三 広報委員会 委員長 伊藤 幹子

古谷野 潔 先生

はじめに

このコーナーのタイトルに「legend」とありますが、私はそのような大層な者ではありません。しかし、比較的歴史の浅いこの分野の関係者の中では高齢、というか大学を定年退職した者ということでお声がかかったのだろうと思います。そこで本稿では、若い会員の皆様があまりご存知ないであろう "orofacial pain" の黎明期とも言える時期のエピソードを、私の経験を基盤にしてご紹介したいと思います。

私は2021年3月末をもって九州大学を定年退職しました.退職に際して教授室を引き払う際に、大事に保管していた学会関連の資料やスライドなどを思い切って処分しました.その中には、1980~90年代のAsian Academy of Craniomandibular Disorders や Japanese Academy of Craniomandibular Disorders の抄録集、それから2000年代の口腔顔面痛懇談会の初期の抄録集などの資料も含まれていました.したがって、本稿に記載する内容は私の記憶によるもので、資料で確認できなかったものが多々含まれます.思い違いや間違いもあろうかと思いますが、ご容赦いただければ幸いです.

キャリアスタート時のバックグラウンド

ご存知の方もおられると思いますが、私の主要な専門分野は補綴歯科です。九州大学歯学部を卒業後、大学院で補綴学を専攻し、下顎運動に関する研究をしました。私の指導教授は、末次恒夫先生という方でした。末次先生は東京医科歯科大学の大学院時代から、スチュアート咬合器で有名なナソロジストの C. Stuart 先生と文通をし、その後、南カリフォルニア大学に留学された先生です。留学中にはナソロジーの開祖と言われる BB. McCollum 先生の講義を直接受けるなどした方で、ナソロジーの考えを基盤とした臨床を日本に紹介した方でした。したがって、その弟子である私は、「顎関節症の基本的な病因は咬合異常である」、「顎関節症の基本的な治療は咬合調整と補綴学的咬合再構成である」という指導を受けました。

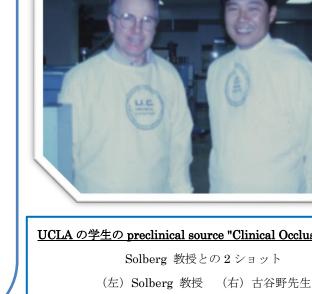
留学のすゝめ~アメリカ留学~

しかし、実際に症例を担当してみると、うまく行かない症例にたくさん遭遇しました。それで海外留学の機会をいただいたときに、咬合と顎関節症に関して世界の最先端で学びたいと思い、アメリカ合衆国の University of California at Los Angeles (UCLA)の "Section of Gnathology and Occlusion" を選びました。この講座は、アメリカ合衆国で初めての「咬合学」の講座であると同時に「顎関節症(実際にはもっと広い範囲の疾患:いわゆる orofacial pain)」の専門診療科を持った講座で、主任教授は William K. Solberg 先生でした。ちなみに、本学会の会員にも多くの弟子を持つ Glenn T. Clark 教授は、当時、UCLA の"Dental Research Institute"の所長を務めておられました。私が留学した前後の期間にも、Clark 教授の元には藤澤政紀先生、鱒見進一先生、窪木拓男先生、馬場一美先生など、多くの日本人研究者が在籍されましたが、当時 Solberg 教授の元に留学していたのは私だけでした。以下にこの UCLA 留学時代のエピソードをいくつか取り上げてみたいと思います。

留学時代のエピソード#1

"Orofacial Pain?"

私が留学志望の手紙をやり取りした時点では, UCLAの留学先の講座名は上述した通 り、"Section of Gnathology and Occlusion"だっ たのですが、アメリカに到着して初めて UCLA の研究室に顔を出したら、Solberg 教授室のドア には、"Section of Orofacial Pain and Occlusion" と書いてあったのです。これは1991年1月のこ とで、私が"Orofacial Pain"(OFP)という言葉と 最初に出会った日でした. OFP の意味はすぐに 分かりましたが、講座名が OFP???という感 想を抱いたことを今でも覚えています.



UCLA の学生の preclinical source "Clinical Occlusion" から



UCLA の学生の preclinical source "Clinical Occlusion" から UCLA の学生指導中の一コマ

留学時代のエピソード#2 OFP との出会い

私は、Solberg 教授の元で臨床、教育、研究に 従事させていただいたので、resident の症例検 討会にも出席していましたが、確か当時の診療科 名は、"TMJ and Facial Pain Clinic" だったと記 憶しています. UCLA がアメリカで最初に OFP の residency program を開設したのですが、そ の中心的な指導教員は、Section Chair の Solberg 教授ではなく, 故 Steven B. Graff-Radford 先生でした.彼は私と同年代だったので はないかと思いますが、当時すでに OFP の世界 をリードする存在でした. 1992年には Solberg 教授とともに Atypical Odontalgia (AO) に関す る論文(参考文献 1)を J Craniomandib Disord 誌に発表したのですが、この論文がきっ かけで AO のことが New York Times 誌に紹介 されたことを記憶しています. これは OFP が一 般の人に紹介された最初のものではないかと思っ ています. やはり OFP の世界ではご高名な Robert L. Merrill 先生も当時,症例検討会に出 席しておられましたが、指導教員ではなく senior resident のような立場で参加されていた ことを記憶しています.

<u>留学時代のエピソード#3</u> <u>Youn-Joong Kim 先生</u>

大韓民国の OFP のリーダーである Youn-Joong Kim 先生をご存知の方も多いと思い ます. 私は当時, Solberg 教授の元で臨床, 教育,研究に従事させていただく傍ら, Clark 教授の元で Masticatory Muscle Pain に関する研究にも従事させていただていまし た. Kim 先生は当時, Clark 教授の元に留 学されていて, 同じ研究テーマに従事してい たので,毎日狭い実験室の中で二人で過ごし ていました. ある日彼に帰国後のことを聞い てみると、出身のソウル大学は優秀な人材が 多すぎて,帰国しても大学に戻るポストが空 いておらず、開業するしかないということで した. それなら UCLA にいる間は、研究よ りも residency program に参加して臨床を 勉強したらどうかと勧めました. 自身でもそ う思っていたのかもしれませんが、彼は、そ の後 UCLA の residency program に入り, 帰国後は韓国の OFP の黎明期のリーダーと して活躍されました. 今では韓国を代表する OFP の臨床家として国際的にも高名な存在 となっているのはご存知のとおりです.



1992 年: Clark 教室に留学中の Dr. Kim(韓国) Dr. Delcanho(オーストラリア), Clark 教授と

留学時代のエピソード#4

<u>American Academy of</u> Craniomandibular Disorders の名称変更

当時, アメリにおける OFP や TMD に関する主要な学会は, American Academy of Craniomandibular Disorders (American ACMD)で, その学会誌は, Journal of Craniomandibular Disorders: Facial & Oral Pain でした.

私の留学中の 1992 年に,

" Craniomandibular Disorders" に関するア メリカ, ヨーロッパ, オーストラリア, ラテ ンアメリカ, アジアの学会による最初の合同 の学会(現在の ICOT: International Conference on Orofacial Pain and Temporomandibular Disorders) がシカゴで 開催され、そのオフィシャルジャーナルの名 称が Journal of Craniomandibular Disorders: Facial & Oral Pain から Journal of Orofacial Pain (JOP)へと変更されることに なりました. たしかその時に参加した世界の 学会の会員は全員が JOP を購読することにな ったと記憶しています. また, American ACMD は、学会名を American Academy of Orofacial Pain (American AOP)に変更しまし た. このように "Orofacial Pain" という言 葉や概念がこの 1992 年に、アメリカだけでな く世界に一気に広がったように思います. 更に言うと, いわゆる顎関節症を示す英語の 用語が "Craniomandibular Disorders" か ら "Temporomandibular Disorders" へと 変化したのもちょうど同じ頃で,以後" Temporomandibular Disorders" という用語 に統一されていく流れができた年だったと認 識しています.

留学時代のエピソード#4

American Academy of

Craniomandibular Disorders の名称変更

更には、Dworkin らが、 RDC-TMD (Research Diagnostic Criteria for Temporomandibular Disorders)を発表したのも同じ 1992 年でした(参考文献 2). 本稿では RDC については触れませんが、この意味でも、1992 年は特別な年だったと言えるのだろうと思っています.

このような大きな変化の節目の時に,ちょうど私はアメリカ留学中(1991~1993)だったので,直接その変化に触れることができたわけで,大変貴重な体験をさせていただきました.



UCLA SCHOOL OF DENTISTRY

10833 Le Conte Avenue Los Angeles, California 90024-1668

KIYOSHI KOYANO D.D.S., D.D.Sc. Visiting Professor Orofacial Pain and Occlusion Rm 43-009 CHS Office (213) 825-6406 Clinic (213) 825-8082

1991年に UCLA が作ってくれた名刺

所属に"Orofacial Pain"とはっきり印刷されています

帰国後間もない頃のエピソード

1990年代初頭は、前述の通り、世界の学会名に"Craniomandibular Disorders"がはびこっていたわけで、"Temporomandibular Disorders"もまだ定着していませんでした。日本語でも「顎関節症」だけでなく、様々な疾患名が使用され、それらの疾患概念についても共通の認識は確立されていませんでした。また OFP の概念も日本では十分に普及していませんでした。帰国後に多くの講演や執筆の機会をいただきましたが、その多くを疾患名と疾患概念の普及に費やしました。

もう一つの大きなテーマ「顎関節症と咬合」の話にも多大な時間と労力を割きました。 おそらく私が日本補綴歯科学会で初めて「顎関節症の病因としての咬合の役割」に疑問を呈した人間だと思いますが、この話はそれなりに長くなるので、本稿では触れないでおきます。

折しも 1993 年には、American AOP の "Temporomandibular Disorders:

Guidelines for Classification, Assessment, and Management"(参考文献 3)が出版されたので、講演の際には、この内容をたくさん引用しました。もちろん、当時の"Guidelines"は今日で言うガイドラインとは全く異なるものだったわけですが、私個人の考えではなく、学会としての考えであり、客観性があるのだということを強調したことを覚えています。そういえば、EBMの波が医学領域で広がったのがやはりこの頃でしたので、EBM の考え方が歯科に導入されたのはもう少し後のことになります。

Asian Academy of Craniomandibular Disorders

留学から帰国した 1993 年の秋に台北で開かれた第3回 Asian Academy of Craniomandibular Disorders (Asian ACMD) で講演する機会をいただきました。留学中に行った研究は長時間の講演に耐えるほどまとまっていなかったので、留学前に行っていた顎関節内障患者の顎関節造影所見とクリッキング音と下顎頭の3次元運動の関連に関する研究について話したと思います(残念ながら、抄録集もスライドも手元に残っていません)。たしかその頃は、日本には正式な CMD に関する学会組織はなく、Asian ACMD の日本人会員の小林義典先生、渡邊誠先生などの方々が日本部会としての活動を主導されていたように記憶しています。この台北のAsian ACMD を機会に、2 年毎に開催される Asian ACMD には毎回参加するようになりました。

皆様もご存知の通り、Asian ACMD は、American ACMD などと姉妹学会となり、ICOT を形成しました. 私は、1997 年に Asian ACMD の councilor を拝命しました。正式な日本部会(Japanese Academy of Craniomandibular Disorders: Japanese ACMD)が、いつ発足したか確認できませんでしたが、このころから必然的に Japanese ACMD の活動のお手伝いもするようになりました。そして、2004 年には Japanese ACMD の会長を拝命しました。

私は、これより 10 年以上も前から OFP について学んでいましたし、前述したように American Academy of Craniomandibular Disorders が American Academy of Orofacial Pain に名称変更したこともよく知っていたので、Japanese ACMD の会長になった際に、学会名を Japanese Academy of Orofacial Pain に改名することを提案し、Japanese ACMD は Japanese Academy of Orofacial Pain (JAOP)へと変わりました。残念ながら、この頃の記録や抄録集を廃棄してしまったので、上記の内容は私の記憶によるもので、正確にいつの学会で決めたのか確かめられませんでした。

日本口腔顔面痛懇談会

2000年には、上述の Asian ACMD などの動きとは別に、日本では、歯科麻酔領域の方々などを中心として、日本口腔顔面痛懇談会が活動を始めていました。私は第3回研究会の大会長として、2002年5月に日本口腔顔面痛懇談会の第3回研究会を九州大学で開催する際にお世話をさせていただきました。

上述の Japanese ACMD (JAOP) は、Asian ACMD の日本支部としての活動が中心だったので日本語の学会 名はありませんでした. 一方、日本口腔顔面痛懇談会には当時英語名はなかったと思います. しかし、両学会 とも同じ「口腔顔面痛」あるいは「orofacial pain」に関する学会(懇談会)なわけですし,orofacial pain に関 するアジアや世界の学会(Asian ACMDやICOT)との連携という視点からも、一つの学会になったほうが良 いと考えました. それで, 2005 年に新潟で開催された日本口腔顔面痛懇談会に出席した際に, 両学会の共催学 会の開催,そして将来的には合併を考えてはどうかという提案をしました.口腔顔面痛懇談会の大会長を務め た後でしたし、自分自身では両学会に籍を置く会員のつもりだったのですが、多分、その時、私は JAOP の代 表として提案したのだと思います。それで、日本口腔顔面痛懇談会では、他学会のヒトが突然学会をひっくり 返すような提案をしたという受け止め方をされた方も多かったようです。配慮が足りない行動だったなと反省 しているところです。ともあれ、それをきっかけに、翌 2006 年には、口腔顔面痛懇談会の窪木拓男大会長と 佐々木啓一 JAOP 会長のご尽力により, 両学会の第1回の共催学会が開催されました. その後, 今村佳樹先生, 岩田幸一先生、矢谷博文先生、鱒見進一先生などを中心に学会の統合に向けての協議が重ねられました.私は、 学会が学会を吸収合併するといったパワーゲームを提案したつもりではありませんでしたので、合併後の役員 には就任しないことを予めはっきりと述べて、この協議に参加しました. 多くの皆様の努力と理解によって、 2009年には両学会の合併が実現し、現在に至っています. 今から振り返っても、あのとき一つの学会になって よかったなと思っています.

おわりに

本稿では、「口腔顔面痛」の黎明期におけるアメリカ、そして日本での私の思い出話を徒然なるままに書きました。現在、口腔顔面痛学会でアクティブに活動されている会員の皆様がご存知ないエピソードもいくつかあったのではないかと思います。これらの変化は、この30年ほどの間に起こったことで、それほど古い話ではありません。

この間に、疾患名、疾患概念、メカニズムの理解、治療法の変遷などの変化が多々ありました。今後も時代とともに更に変化していくのだと思います。 我々は、そうした常に変化していく様々な概念の中の一時代を生きているのだということを頭の片隅においていただけると幸いです。

すっかり長くなってしまいました. 今後のますますの本学会の発展を祈りつ つ筆を置きたいと思います. 長い間お世話になりありがとうございました.



2018年: Clark 教授が来日された際の写真

Clark 教授と Clark 教室のかつての日本人留学生との 1 枚 古谷野先生(写真右から 6 番目), Clark 教授と奥様、松香先生ほか

参考文献

- 1. Graff-Radford SB, Solberg WK. Atypical odontalgia. J Craniomandib Disord. 1992;6(4):260-5.
- 2. Dworkin SF, LeResche L. Research diagnostic criteria for temporomandibular disorders: review, criteria, examinations and specifications, critique. J Craniomandib Disord. 1992;6(4):301-55.
- 3. McNeill C. Temporomandibular Disorders: Guidelines for Classification, Assessment, and Management. 1993. Quintessence Publishing Co, Inc, Carol Stream, Illinois

【古谷野 潔 先生のプロフィール】



【略歴】

- 1983年 九州大学歯学部卒業
- 1987年 九州大学大学院歯学研究科博士課程修了(歯学博士)
- 1987年 九州大学歯学部附属病院助手
- 1991年 文部省在外研究員(米国 UCLA 客員助教授)
- 1997年 九州大学歯学部教授
- 2003年 九州大学歯学部附属病院長
- 2012年 九州大学総長特別補佐
- 2017年 九州大学大学院歯学研究院長・歯学府長・歯学部長
- 2019年 九州大学病院副病院長(統括・歯科担当)
- 2021年 九州大学名誉教授,九州大学大学院歯学研究院特任教授

【所属学会】

日本口腔顔面痛学会 名誉会員

日本補綴歯科学会 元理事長

日本顎関節学会 元理事長

日本学術会議 元会員,元歯学委員会委員長

Japanese Academy of Orofacila Pain Past President

Asian Academy of Prosthodontincs Past President

Asian Academy of Osseointegration Past President

International College of Prosthodontists Past President

【趣味】

ドライブ,食べ歩き,ワインなど

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp